

「ナスバギャラリー IN 東京」 日本自動車会館で今年度も開催 多くの人々が展示作品に魅了される

交通事故により重い障がいを負った方々や保護者を失った子どもたち（交通遺児）の創作作品を展示する「ナスバギャラリー IN 東京」が2022年11月28日～12月2日、東京・港区の日本自動車会館1階ロビーで開催され、入館団体・企業の職員や来場者など約450人が鑑賞しました。ナスバギャラリーは、独立行政法人自動車事故対策機構（NASVA：ナスバ）と当会議所の共催として2019年度から開催されており、今回で4回目。重度障がいを負った方々が創作した切り絵やちぎり絵、書道などの作品7点、療養施設入院患者の皆さんによる詩やハンドクラフトなどの作品3点をはじめ、2021年度に実施された「ナスバ交通遺児友の会」絵画コンテスト入賞作品25点の計35点が展示されました。

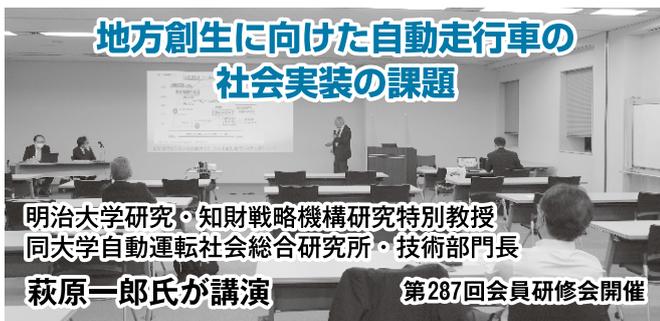
作品はロビーの壁面に展示。館内を通行する職員などが立ち止まって展示作品やその説明文を熱心に見入る姿が目立ち、感情のこもった子どもたちの作品を前に、「とても素晴らし作品ばかり」、「制作者が書かれた説明文が詩のよう」などの感想も聞かれました。また、作品を撮影する人も多く見られ、作品の持つ表現力の高さがうかがえました。



「ナスバギャラリー IN 東京」を鑑賞するナスバの中村理事長（左）。ご両親とともに日本自動車会館を訪れた東京都在住の小林彦輝さん（中央）。「たくましく毎日を過ごしていきたい気持ち」を表現した」という自作「翔」の前で（右）

開催期間中に同会館を訪れたナスバの中村晃一郎理事長は、「交通事故の被害者をゼロにしたいというのは自動車に関わるすべての人の共通の願いです。日本自動車会館で開催する意義は大きいと思います」と話し、ナスバギャラリーが悲惨な交通事故を根絶する後押しになることに期待を寄せました。

日本自動車会議所は交通安全啓発活動の一環として、今後もナスバと連携して定期的に展示会を開催していく予定です。



明治大学研究・知財戦略機構研究特別教授
同大学自動運転社会総合研究所・技術部門長
萩原一郎氏が講演

第287回会員研修会開催

日本自動車会議所は2022年11月30日、東京都港区の日本自動車会館「くるまプラザ」会議室で第287回会員研修会を開催しました。会場では新型コロナウイルス感染対策を引き続き実施、リモート配信も併用し、全国から約70名に参加いただきました。今回は「地方創生に向けた自動走行車の社会実装の課題」をテーマに、明治大学研究・知財戦略機構研究特別教授で、同大学自動運転社会総合研究所・技術部門長の萩原一郎氏を講師にお迎えしました。



萩原 一郎氏

高齢化・過疎化が目立つ地方では、地域課題解決の一環として、全国各地で自動走行車の実証実験が進行中です。同研究所でも長崎県対馬市の公道で、産学官民が連携して実証実験を行っています。講演では、地方の公共交通に触れ「事業性の厳しさから縮小が続いており、移動手段の確保が難しい」と指摘。対馬市では、安価で導入が容易とされる「ターゲットライン追従方式」で自動運転システムを開発、検証に取り組んでいると詳しく解説しました。

その上で、社会実装に向けた現地アンケート等も踏まえ「システムの不具合は見られず、安定した走行ができたが、後続車などの交通を乱さないためにも制限速度を時速20kmとするかが検討課題」と分析。さらに、福井県永平寺町や茨城県境町で進められている別方式の自動走行車、日産自動車など大手メーカーが開発している自動運転技術も紹介。自動運転が地方創生に寄与するためにも「『レベル4』（特定条件下での完全自動運転）の実現も加速させたい」と強調しました。